



航空物流の利便性向上

那覇空港をアジア航空貨物ネットワークの拠点に 「沖縄貨物ハブ」構想が進行中

全日本空輸株式会社

総合物流施策大綱を受けて、平成25年9月に策定した「総合物流施策推進プログラム」では、航空物流の利便性向上を取り組みとしてあげています。アジアにおける国際航空貨物の拠点として、貨物取扱量が増大する沖縄・那覇空港の機能強化もその一つ。全日本空輸株式会社（以下、ANA）では、アジア地域における国際航空貨物の拠点として、地の利を生かした取り組みが行われています。

アジア各都市までの飛行を4時間で 那覇空港をアジア航空貨物 ネットワークの中心に

沖縄貨物ハブの供用が開始されたのは、平成21年10月。国際物流拠点形成構想を持つ沖縄県と、アジア域内の貨物を取り込みたいANAとの戦略が一致したことをきっかけに「沖縄貨物ハブ」構想がスタートしました。

那覇空港は、東アジア、東南アジアの主要な都市まで飛行4時間圏内とい

う場所に位置しています。ANAでは、ここを中継基地に日本とアジアの主要都市間を高速で輸送する航空貨物ネットワークの中心となる沖縄貨物ハブとして運用。貨物エリアの広さはサッカーコート4面分（2万7700㎡）あり、深夜になると上屋前^{うわや}に多くのフレイター（貨物専用機）が集結します。

現在、那覇空港とフレイターによる直行便でつながるのは、国内では成田、羽田、名古屋、関西の4カ所。アジアでは台北、バンコク、香港、上海、ソウルの5カ所^{チャイナ}で、さらに青島にも就航が予定されています。沖縄を中心に、各地を結ぶ路線が自転車のハブとスポークに似ていることから、「沖縄ハブ&スポーク方式」と呼んでいます。

沖縄の地の利を生かしたこの方式では、例えば、日本各地の空港を夜11時に飛び立てば、午前2時頃には沖縄に、貨物を積み替えて翌朝にはアジア各国の目的地に到着。発地から着地まで、所要時間は10時間ほどということも可能になっています。

平成24年度のANA航空貨物輸送の取扱重量実績シェアでは、国際貨物全体のうち中国を含めたアジア発着が6割にのぼっています。そのうち沖縄貨物ハブが取り扱うシェアは約5割に達しています。

成長するアジア都市間の 貨物需要を取り込む

近年、世界的な航空貨物需要が低迷する中でも、有望なのがアジア地域です。ANAが行った発着地域別平成24～26年の航空貨物の需要予測では、アジア域内で4・8%の高成長が見込まれています。

そのような中、なぜ各都市間の直行便ではなく、わざわざ沖縄貨物ハブを経由させるのでしょうか。理由の一つは、日本を除くアジア各都市間の輸送にあります。例えば、香港・上海間の貨物を運ぶ場合、両都市



約50tの貨物が搭載可能なフレイター「B767-300F」9機が稼働中。さらに、平成26年3月には10機目のフレイターが導入される予定。



B767-300F フレイターの上部貨物室内の様子。



間の路線は中国系の航空会社が持つっており、ANAには直行便がありません。しかし、いったん沖縄を経由することで、日本の航空会社でも香港・那覇・上海というルートで貨物を取り込むことができます。つまり、日本の航空会社が日本を除くアジア各都市間の直行便を飛ばせなくても、沖縄貨物ハブを経由することでルートを確保できることになります。

また、効率が良い点も特徴です。仮に国内外9つの空港間をすべて直行便で結べば80便以上が必要です。しかし沖縄貨物ハブを経由すれば、たつた9機でネットワークが実現できます。

より速くより高品質な航空物流へ

ANAでは輸送のスピードと品質を上げることで、付加価値の高い商品の取り込みを図っています。

発注から納品までのトータル輸送時間が48時間から72時間という特急便「エクスプレス貨物」は、一般貨物に比べて需要が伸びています。

運ばれる品物は、半導体関連部材な



深夜に行う荷物の積み替え。1時間で作業を終わらせる。貨物の7割強が航空機から航空機へ直接積み替えられる。

どの電子部品、電子機器やアパレルなどの試作品、厳しい温度管理が必要な医療分野の試薬・化学薬品、経済発展が著しい東南アジア富裕層向けの日本産生鮮品など、高付加価値品も運ばれています。

また、平成24年秋から沖縄貨物ハブの上屋内部で、通関手続きなどの業務を開始した物流企業は、ANAと協力し温度指定±1℃まで可能な保冷コンテナなどを利用した輸送の取り扱いも始めました。これにより、例えば農水畜産品など日本各地の名産品を、生産者から海外の消費者まで新鮮な状態で届けることが可能となるなど、輸出の拡大につながるものと期待されます。

空の「万国津梁」を目指して

沖縄県では那覇空港を物流の集積



那覇空港の上屋全景

地域にするために、平成26年度末には空港に隣接する国際物流拠点産業集積地域に敷地面積1万5000㎡の物流施設を完成させる予定です。また、平成25年度からは利用需要の増大に対応するため、2本目の滑走路の増設事業に着手します。これらの取り組みで、アジアと日本の架け橋となる国際物流拠点が形成されていきます。

15世紀、沖縄は「万国津梁（＝中国、東南アジア各国の人や文化の架け橋）」と呼ばれ、国際貿易で栄えた国でした。現代では船から飛行機へ。航空時代の新たな「万国津梁」に生まれ変わろうとしています。



那覇空港の上屋内部。通関業務など輸出入に必要な工程をワンストップオペレーションで対応。